パーソナリティ研究
2007　第16巻　第1号　1–12

原　著

© 日本パーソナリティ心理学会 2007

中高年期の自己評価における発達的特徴[1)]
――自尊感情との関連，および領域間の関連に注目して

若　本　純　子
白梅学園大学

本研究は，中高年期成人2026名を対象に，自己評価と自尊感情との関連，自己評価の5下位領域間の関連，それらの関連における年齢段階差を検討した。自尊感情との関連を検討した重回帰分析では，中高年期全体を通して内的自己が，中年前期・ポスト中年期では社会的自己・生活的自己（経済面）も有意な説明変数であることが明らかにされた。領域間の相関分析では，各領域に対する自己評価は独立して付与されることが示唆された。領域間の関連における年齢段階差の検討では，男性は生活的自己の経済面，女性では経済面・健康面と他の自己領域との関連において有意差が示された。そして，中年前期は他の年齢段階と比べて，領域間の相関が有意に強い傾向にあった。一方，中高年期後半は経済面と他領域との関連をめぐって，中年前期よりも有意に領域間の相関が弱く，領域間の独立性がより顕著と考えられた。これらの自己評価の構造面の特徴は，“well-being の逆説”や“危機”という中高年期の発達的現象を説明しうると示唆された。

キーワード：中高年期，自己評価，自尊感情，成人発達

問　題

人生後半は老いの時期である。身体面・心理面の機能低下を伴う老いの時期において，自己概念は発達およびwell-being[2)]のための心理的資源として知られる (Baltes & Baltes, 1990)。それゆえに自己概念をめぐる成人発達研究は広範かつ多数存在する（Lachman & Bertrand, 2001 ；岡本, 2002）。そこでは包括的な自己概念を用いた研究が中心的な位置を占めてきた（e.g.,アイデンティティ：岡本， 2002 ； Whitbourne, 2002 ；自尊感情：Brandstädter & Greve, 1994 ；生活満足感： Diener, Emmons, Larson, & Griffen, 1985）。成人期以降の発達が総体的な人格の成熟という質的変化の過程として位置づけられていることから(e.g., Erikson, 1950)，そのような研究動向は頷かれる。しかし，包括的自己概念を用いた研究は，自己概念の発達過程を詳細に捉えられるとは言いがたい。それは，成人期の発達は多くの機能領域で個別に展開するという特徴をもつ (e.g., Whitbourne, 2002) ためである。近年の社会認知的な自己研究において，自己概念は多次元性を有する動的な認知的構成概念として理解され，その構造と機能の解明が試みら

1) 本研究の調査2はお茶の水女子大学21世紀COEプログラム“誕生から死までの人間発達科学”平成14年度公募研究助成を，調査3は平成14年度ユニベール財団研究助成（研究代表者：矢吹真理）を受けて実施された。

2) well-being という語に関しては，従来，幸福（感），安寧などの訳語が当てられてきた。しかし Ryff (1989) が well-being をポジティブな心理的機能として概念化して以降，それに依拠する成人発達研究においては原語表記される場合がある（e.g.,西田，2000）。本研究も同様の立場から，well-being を原語のまま使用する。

れている（e.g., Harter, 1998 ；伊藤, 2002 ； Marsh & Hattie, 1996）。そこでは，日常文脈で認識される自己概念は領域ごとに独立しており，状況・環境に応じて変化するものとして認識されている（e.g., Harter, 1998 ；伊藤, 2002）。したがって，複数の領域から構成される自己概念を用いた検討は，成人発達の過程を具体的にかつ詳細に捉えるのに有用と考えられる。

領域個別的な自己概念の発達的検討を行ってきた代表的研究者として，Harter と Marsh が挙げられる。2 人に共通しているのは，分化した自己概念に重要な領域とそうでないものを想定して全体的自己概念に対する影響力に違いを認める点，そして，その様相には発達的差異が存在すると考える点であり (Harter, 1998; Marsh & Hattie, 1996) 自己概念を発達的に捉える視点として示唆的である。しかし，彼女たちの検討は幼少期から青年期を主たる対象としており，成人期以降には及んでいない。Harter, Marsh のみならず，自己概念を多領域・多次元に捉え発達的検討を行おうとする試みの多くは，成人期を対照群として設定する（e.g., 佐久間，2002），あるいは青年期で作成された枠組みを成人期に援用する（e.g., 沢崎，1995）もので，成人独自の発達的文脈を考慮した研究は少ない。中で，若本（2003 ；若本・無藤，2004）は，中年期・老年前期の自己概念が独自の構造をもつ，すなわち青年期では身体的自己の一部である“体力”，社会的自己の一部である“経済”などの，生活の前景で経験されるあいまいで表層的な自己の側面が“生活的自己”という独立した領域を構成することを見出している。だが，因子分析結果の解釈から得られたこの知見は，方法論の点でさらなる工夫の余地を残している。

本研究の目的　以上の議論を踏まえ，本研究は，人生後半における自己概念の発達的特徴を構造面から明らかにすることを目的とする。成人発達研究において領域個別的な自己概念に関する研究は稀少であり，検討のための方法論は確立されていない。そこで，青少年を対象に数多くの検討を重ねてきた Harter と Marsh の方法論を整理し，援用することとする。まず自尊感情と領域個別的な自己概念との関連に注目する方法が挙げられる。Harter (1998) は，自己概念の発達的特徴を考慮するにあたり，領域個別的自己概念と全体的自己概念との相関を比較することが有用であると示唆している。Marsh も同様の関心を示しつつ，領域個別的な自己概念と自尊感情との間に階層的構造を仮定し，回帰分析によって各発達段階における中核的な領域を同定している(Marsh & Hattie, 1996)。このような全体的自己概念と領域個別的自己概念との関連を検討する研究は膨大に存在し，自己概念を構造的に理解するのに有用である（伊藤，2002）。さらに，その関連に発達的特徴が示されるとの見解 (Harter, 1998; Marsh & Hattie, 1996) を加えると，自己概念の構造面は成人独自の文脈を反映する特徴を内包すると考えられる。そこで，本研究の第 1 の目的として，Harter (1998), Marsh & Hattie (1996) の手法に則り，自尊感情と自己概念との関連における人生後半固有の構造上の特徴を検討する。

次に，領域個別的な自己概念における領域間の関連に注目する。Marsh は自己概念の下位領域間の相関を分化の指標として採用した検討により，子どもの自己概念の構造が発達段階によって異なることを示している (Marsh & Hattie, 1996; Marsh, Ellis, & Craven, 2002)。しかし，自己概念の分化を達成した成人において，領域間の関連は別の意味をももつと考えられる。たとえば成人においては，各自己領域を区別し独立したものとして捉える指標として理解することが可能であろう。自己概念が多くの領域へと分化し独立していることがどのような意味を持つのかについて，Linville (1987) が“自己複雑性 self-complexity”として概念化している。彼女は，自己複雑性が高い場合，何らかのネガティブな心理的影響が直接的に関連する自己領域に限定される，その結果として，他の関連の弱

い領域はその影響にさらされずに済むとの理解から，自己複雑性が高い人は精神的健康が高いことを示唆した。それのみならず，自己領域が明細化され独立している程度は成人発達において特別な意味を持ちうる。なぜならば，自己領域間の独立性が，人生後半の特徴的な発達的現象である“well-being の逆説”(paradox of well-being, Mroczek & Kolarz, 1998) を構成するメカニズムの一部であると考えられるためである。“well-being の逆説”とは，人生後半が衰え，喪失，有限性などの影響下にあるにもかかわらず，高水準の well-being が保持されることを指す。この現象が生じるメカニズムの代表的な理論モデルとして“補償を伴う選択的最適化 selective optimization with compensation”(Baltes & Baltes, 1990) が挙げられる。そこでは，加齢に伴い衰えた領域に対して関与を停止したり，より優勢な領域やスキルで代行するといった補償的な対処によって，人生後半においても well-being は維持されると言われている。このメカニズムが機能するためには衰えた領域とそうでない領域が区別して把握され，自己領域間に一定の独立性があることが前提となる。したがって，成人発達における自己領域間の関連とは“補償を伴う選択的最適化”が機能するための基盤であり，well-being，ひいては発達・適応の水準と特徴を間接的に予測しうると考えられる。しかし，このような観点からの検討はいまだ行われていない。そこで，第 2 の目的として，領域個別的自己概念の領域間の関連を領域間の独立性を示唆する指標と見なし，成人発達に対する意義という観点から検討を行う。

枠組み・概念規定　本研究では，領域個別的な自己概念として自己評価 self-evaluation を，全体的自己評価として自尊感情を用いる。評価 2 測度を用いるのは，自己評価がネガティブな状況下における個人の行動に強い影響力をもち，情緒や well-being，成人のパーソナリティ発達と密接に関連すると指摘されているためである (Baltes & Baltes, 1990; Heckhausen, 2001)。また，中年期内の変化および中年期から老年期への移行の検討が不足しているとの批判 (Heckhausen, 2001) に応え，人生後半に発達的様相の異なる下位年齢段階を想定し，各々の発達的特徴を把握する。その検討は若本・無藤 (2006) に依拠して行う。すなわち人生後半を比較的軽微な老いの影響下にあり発達上の連続性をもつ“中高年期”（30 ― 75 歳）とする。また，その中に 4 つの下位段階として，老いの端緒にあたる“中年前期”（40 代），退職という重要なライフイベントを含む“中年後期”（50 ― 65 歳），昨今の長寿高齢化によって深刻な健康問題をもたず，中年期との連続性が示唆される“ポスト中年期”（66 ― 75 歳），統制群としての“プレ中年期”（30 代）を設定する。

Baltes (1987) の構造的・文脈的要求が生涯発達過程を特徴づけるとの指摘を考慮すると，人生後半の発達は老いによって特徴づけられる発達過程と換言できる。この見解に準じ，本研究では，中高年期成人の自己概念に見出される特徴は，老いの影響下にある中高年期固有の発達的特徴として捉えうると見なし，解釈と考察を行う。しかし，その理論的想定のみでは実証的アプローチとして十分とは言えない。したがって，検討結果を発達的特徴として同定するにあたっては，成人発達の先行研究との照合を行い，できる限り実証性を高めるよう努めることとする。

方　法

郵送による個別依頼・個別回収形式の質問紙調査を以下のとおり実施した。

調査対象・時期　調査 1　対象： 30 ― 65 歳男女 1800 名。筆者の知人・友人，その紹介者。時期： 2001 年 6 ― 7 月。回収： 1020 名（回収率 56.7%）。調査 2　対象： 66 ― 75 歳男女 1200 名。N 県 A 高校卒業者。A 高校は地方都市（人口約 24 万人）の公立高校。時期： 2003 年 2 月。回収： 722 名（回収率 60.2%）。調査 3　対象： 37 ―

60歳男女1500名。S県B高校卒業者。B高校は首都圏市部（人口約7万人）の公立高校。時期：2003年6―7月。回収：347名（回収率23.1%）。全協力者がコミュニティに在住しており，施設入居者は含まれていない。

調査内容　(a) 自己評価尺度：16項目5段階評定（若本，2003；若本・無藤，2004）。成人期・老年期における妥当性が確認されている。容貌・体型など外見に関する4項目からなる“外見的自己”，職業・役割など社会的側面3項目からなる“社会的自己”，性格・家族など個人の中核である心理社会面5項目からなる“内的自己”，日常生活の意識の前景で感じられる明細化されにくい自己概念のうち，健康・体力の2項目からなる“生活的自己（健康）”，経済・生活の2項目からなる“生活的自己（経済）”，以上5領域によって構成されている。“私の○○（自己の諸側面）”に対する満足度として評定を依頼した。(b) Rosenberg自尊感情尺度：10項目5段階評定。星野 (1970) の訳によるものを用いた。(c) フェイス項目：年齢，性別の他に，職業，経済的不安の有無，教育歴，婚姻歴，子の有無，世帯構成を尋ねた。

分析対象者　3回の調査で回答を得られた2089名のうち，年齢未記入，不完全回答のものを除外した2026名を分析対象とする。内訳は，男性プレ中年期148名，中年前期187名，中年後期202名，ポスト中年期378名，女性プレ中年期234名，中年前期263名，中年後期278名，ポスト中年期336名である（平均年齢55.10歳）。男性の87.9%，女性の74.2%が既婚者であり，全体の82.1%に子どもがある。また43.4%が2世代世帯，31.4%が夫婦世帯で生活している。就業者は男性の67.3%（ポスト中年期の有職率は34.2%），女性の49.2%，専業主婦は40.3%である。教育歴の平均年数は男性14.8年，女性13.7年である。

ここで，対象抽出の手続き，および調査3が著しく回収率が低かった点に含まれる問題点について言及する。調査1は筆者の知人・友人・その紹介者を対象とし，調査への了承を直接的・間接的に取り付けて実施された。一方，調査2, 3は名簿から選ばれた未知の方々への文書での調査協力依頼によって行われた。そのうち調査3の回収率のみが低かった理由としては，調査2が高齢者に向けて地方都市で実施されたのに対して，調査3は首都圏の中年期成人に対して実施されたため，転居・異動が多く調査票が未着となってしまったこと，個人のプライバシーに対する考え方がより鋭敏で調査拒否が多かったことの2点が考えうる。以上，本研究のサンプルは等質性において限界が指摘される。

結　　果

因子分析と合成変数の内的整合性　自己評価尺度を先行研究（若本，2003）の5因子（外見的自己，社会的自己，内的自己，生活的自己（健康），生活的自己（経済））モデルを適用し確認的因子分析を実施した結果，GFI＝.96，AGFI＝.94，RMSEA＝.05という値が得られ，モデルは適合しているものと考えられた（服部，2002の基準による）。また，自尊感情，情緒不安定性は探索的因子分析の結果，固有値の差から1因子性が確認された。これらの因子の素点を合計し項目数で除したものを合成変数得点とした。α係数から全変数で一定の内的整合性が認められた($.70 \leqq \alpha \leqq .88$)。

性差・年齢段階差の検証　成人発達研究では，性分業やライフコース，資源の違いにより発達経路そのものが異なるとして，性差への配慮が求められる（Gilligan, 1982 岩男監訳 1986）。また，本研究では年齢段階による発達的差異の存在を想定した検討を行うが，その確認も必要である。そこで，全使用変数を従属変数とする，性2水準（男・女）および年齢段階4水準（プレ中年期・中年前期・中年後期・ポスト中年期）による二要因の分散分析を実施したところ，すべての分析において有意な結果が得られた (Table 1)。とくに年齢段階による差は顕著であった。この結果を踏ま

Table 1　自己評価・自尊感情を従属変数とする性・年齢段階による二要因分析結果および平均値 (*SD*)

従属変数	*F*	主効果		交互作用
		性	年齢段階	
外見的	14.52***	63.29***	8.21***	.22
社会的	12.62***	.25	27.81***	.60
内的	10.43***	1.85	19.91***	1.94
生活的（健康）	4.57***	.03	10.03***	1.22
生活的（経済）	14.53***	7.95**	32.07***	.47
自尊感情	2.76**	.65	3.41*	.22

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
自己評価								
外見的	3.31 (.65)	3.34 (.64)	3.47 (.60)	3.48 (.56)	3.02 (.74)	3.13 (.76)	3.22 (.74)	3.23 (.72)
社会的	3.32 (.74)	3.35 (.74)	3.61 (.62)	3.65 (.58)	3.28 (.76)	3.41 (.76)	3.57 (.60)	3.62 (.58)
内的	3.54 (.60)	3.50 (.64)	3.66 (.58)	3.75 (.48)	3.41 (.68)	3.57 (.62)	3.61 (.59)	3.72 (.55)
生活的（健康）	3.01 (.92)	3.07 (.89)	3.36 (.90)	3.34 (.90)	3.15 (.93)	3.10 (.95)	3.28 (.96)	3.29 (.97)
生活的（経済）	3.15 (.98)	3.09 (.89)	3.52 (.74)	3.52 (.73)	3.24 (.91)	3.27 (.89)	3.58 (.82)	3.61 (.77)
自尊感情	3.53 (.59)	3.46 (.58)	3.58 (.53)	3.59(.59)	3.41 (.62)	3.55 (.62)	3.56 (.60)	3.55 (.56)

***p<.001, ** p<.01, *p<.05

え，性による発達経路の違い，および年齢段階による発達的差異があるものと見なし，以下の検討は性・年齢段階による 8 群別に行う。

自己評価と自尊感情の関連，自己評価の下位領域間の関連

まず自己評価と自尊感情，ならびに自己評価の 5 領域間の関連を検討するために相関分析を行った (Table 2)。自己評価と自尊感情との相関は .16≦r≦.59，自己評価の領域間の相関は.21≦r≦.59 であった。一般に相関係数値は.20 以下を“ほとんど相関がない”，.20 から.40 を“弱い相関がある”，.40 から.70 を“中程度の相関がある”，.70 以上を“強い相関がある”と解釈される（豊田，1998）。その基準に則ると，自己評価と自尊感情との相関，自己評価の領域間の相関はともに弱から中程度の範囲と言ってよい。その中で，性別，年齢段階を問わず中程度の値が示されたのは内的自己と自尊感情との相関においてであった。一方，自己評価の領域間の関連は男女で異なる様相を示した。男性では，外見的自己と社会的自己・内的自己・生活的自己（健康）との間に，また社会的自己と内的自己との間に中程度の相関が示された。対して，女性では内的自己と社会的自己・生活的自己（経済）との間において中程度の相関が示された。続いて，自己評価と自尊感情との階層的関連を，自尊感情を従属変数，5 領域の自己評価を説明変数とする重回帰分析により検討した[3)]。その結果，全群において内的自己が有意な説明変数であった。中年前期とポスト中年期ではそれに加え，社会的自己，生活的自己（経済）も有意な説明変数であった (Table 3)。

自己評価と自尊感情，自己評価の領域間の関連における年齢段階差

最後に，自己評価と自尊感情，そして自己評価の各領域間の関連に年齢段階による差異があるかを検討した。検定は，小塩 (2004) に則り，2 変数

3) 説明変数間の相関係数値 (Table 2) と β 係数値 (Table 3) の間に大幅な差が見られないこと，および VIF 値の許容度から，多重共線性の影響はないと判断した (Stevens, 2002)。

の差を標準正規分布に変換して行った。その結果，健康面・経済面双方の生活的自己と他の領域との関連において年齢段階による有意差が見出される傾向にあった。また，その多くは，中年前期と他の年齢段階間の有意差であった。生活的自己の中でも，男性では経済面をめぐる関連において，女性ではそれに加え，健康面をめぐる関連において有意差が見られ，差の様相は男女で異なっていた。なお，自己評価と自尊感情との関連において，年齢段階による有意差は見出されなかった (Table 4)。

Table 2　自己評価・自尊感情の相関分析結果

	1	2	3	4	5	6
1　外見的	–	.39	.35	.32	.37	.31
	–	.32	.54	.56	.46	.41
	–	.38	.48	.34	.28	.30
	–	.55	.59	.49	.30	.36
2　社会的	.54	–	.47	.21	.46	.41
	.56	–	.46	.33	.41	.40
	.54	–	.47	.32	.48	.36
	.46	–	.53	.38	.39	.44
3　内的	.49	.56	–	.27	.53	.58
	.56	.49	–	.52	.49	.59
	.50	.50	–	.34	.44	.55
	.50	.57	–	.47	.48	.59
4　生活的	.48	.34	.45	–	.27	.16
（健康）	.56	.31	.41	–	.52	.37
	.53	.36	.35	–	.46	.29
	.50	.35	.41	–	.40	.29
5　生活的	.40	.58	.43	.39	–	.39
（経済）	.53	.56	.51	.37	–	.44
	.34	.49	.36	.45	–	.31
	.34	.44	.31	.36	–	.39
6　自尊感情	.35	.39	.52	.36	.37	–
	.36	.42	.48	.17	.43	–
	.28	.38	.51	.22	.43	–
	.42	.51	.51	.35	.39	–

注．すべての相関係数は $p<.05$ で有意であった。
左下の三角行列は男性の相関係数，右上は女性のものである。それぞれの1段目にはプレ中年期，2段目には中年前期，3段目には中年後期，4段目にはポスト中年期の値を記した。

考　察

ここでは，見出された各々の結果を成人発達の先行研究と照合し，発達的観点から考察を行う。

自己評価と自尊感情との関連における中高年期の発達的特徴

自己評価と自尊感情との関連の検討において，性・年齢段階を問わず自尊感情と中程度の相関を示したのは内的自己であった。他方，階層的に構造を捉える重回帰分析でも，内的自己は自尊感情に対する安定した高い寄与を示していた。したがって，内的自己は中高年期成人の自尊感情を規定する自己領域であると言えるだろう。個人の性格や感情といった内的要素と家族など身近な人間関係からなる内的自己が自尊感情の有意な説明変数であるのは，成人の生活・心性を鑑みるに首肯される結果である。それと同時に，青少年においては学業成績（蘭，1992）や身体的魅力 (Harter, 1998) などが自尊感情に影響力をもつのとは異なる，中高年期の発達的特徴として同定され

Table 3　自尊感情を従属変数，自己評価を説明変数とする重回帰分析結果

	男				女			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
説明変数	β				β			
外見的	.05	.04	−.01	.07	.08	.08	.00	−.04
社会的	.06	.17*	.13	.23***	.16*	.13*	.11	.18**
内的	.36***	.33***	.41***	.27***	.47***	.42***	.46***	.48***
生活的（健康）	.10	−.10	−.02	.07	−.03	−.01	.09	−.02
生活的（経済）	.13	.18*	.12	.15**	.02	.15*	.01	.11*
R^2	.308	.303	.287	.366	.366	.398	.324	.380

***$p<.001$, **$p<.01$, *$p<.05$

Table 4　自己評価の下位領域間の関連，および自己評価と自尊感情との関連における年齢段階差

	男			女		
	年齢段階 (*rs*)		*t*	年齢段階 (*rs*)		*t*
a) 自己評価の領域間の関連						
生活的自己（経済）との関連						
生活的（経済）− 外見的	前期 (.53)	ポスト (.34)	3.05**	前期 (.46)	ポスト (.30)	2.64**
	前期 (.53)	後期 (.34)	2.61**	前期 (.46)	後期 (.28)	2.48*
生活的（経済）− 社会的	プレ (.58)	ポスト (.44)	3.21**	プレ (.46)	ポスト (.39)	2.53*
	前期 (.56)	ポスト (.44)	3.03**	前期 (.41)	ポスト (.39)	2.03*
	プレ (.58)	後期 (.49)	2.53*		−	
	前期 (.56)	後期 (.49)	2.21*		−	
生活的（経済）− 内的	前期 (.51)	ポスト(.31)	3.52**	プレ (.53)	後期(.44)	2.07*
	前期 (.51)	後期 (.36)	2.39*	プレ (.53)	ポスト (.48)	2.37*
生活的自己（健康）との関連						
生活的（健康）− 外見的		−		前期 (.56)	プレ (.32)	2.57*
		−		前期 (.56)	後期 (.34)	2.34*
生活的（健康）− 内的		−		前期 (.52)	プレ (.27)	2.34*
		−		前期 (.52)	後期 (.34)	2.02*
生活的自己（経済・健康）の関連		−		前期 (.52)	プレ (.27)	2.54*
生活的自己以外の自己領域間の関連						
外見的 − 内的	前期 (.56)	ポスト (.50)	2.50*		−	
外見的 − 社会的	前期 (.56)	後期 (.46)	1.98*		−	
b) 自尊感情と自己評価との関連		−			−	

注.　有意差があった相関のみを表示。**t>2.58, *t>1.96

るであろう。

また，中年前期とポスト中年期においては，内的自己に加え，社会的自己と生活的自己（経済），すなわち自らの仕事や社会的立場そして生活の中で実感される経済状態に対する評価が，自尊感情に有意な寄与を示すことも見出された。これら 2 つの時期は，昇進や出世の限界などによって仕事に対する考え方や意味づけ，時間配分が変化したり，退職後・老後における新たな役割が模索されたりと，社会的側面の変動に由来する葛藤や内省の存在が指摘されている (Levinson, 1978 ；岡本, 2002)。そのような状況下では，社会・経済面に関する表層的・個別的領域はともに評価の変動が生じやすく，全体的自己評価である自尊感情に対して影響を及ぼすであろう。それが中年前期・ポスト中年期という特定の時期に，社会面・経済面が自尊感情に対してもつ寄与を高めるという結果につながったと考えられる。

自己評価の領域間の関連における中高年期の発達的特徴

自己評価 5 領域間の相関分析においては，中程度から弱い相関が見出された。相関分析をもとに，対である 2 側面のいずれの性質をもつかを推定するには分散説明率が用いられる（e.g., 幼児の自己概念の分化／未分化： Marsh et al., 2002 ；成人の自己概念の継時的な不変性／可変性： Fleeson & Heckhausen, 1997）。自己評価 5 領域間の相関分析の結果は.21≦r≦.59 であり，分散説明率は約 3 ― 35% であった。最大でも約 35% の分散説明率という結果からは，自己領域は明細化して捉えられ，自己評価は領域を区別して付与されていると見なせるであろう。すなわち中高年期における自己評

価は領域ごとに独立していると示唆され，先行研究（e.g., 伊藤，2002）とも合致する。

一方，中程度の相関を示した領域は男性と女性で異なっていた。男性では，外見的自己と社会的自己・内的自己・生活的自己（健康），社会的自己と内的自己との相関において，女性では内的自己と社会的自己・生活的自己（経済）との相関において中程度の値が示された。このような男女の相違が生じる背景について，成人を対象とする領域個別的自己概念の研究が不足しているゆえに明言することは難しい。結果からの推測としては，男性では仕事や社会的役割と内面や家族関係は分割しては感じられにくく，外見は健康や社会的役割との関連の中で認識されるのかもしれない。あるいは上瀬 (1999) が言うように，男性は女性に比べて自己を明細化して捉えない傾向があるのかもしれない。他方，女性では，自己の内面についての評価は，役割や職業そして経済状態の評価と関連しているとの結果であった。職業をもつ女性が専業主婦よりも精神的健康が高いことを示す研究は多い（清水，2004）。本研究の結果もそれらに類するものと思われる。

自己評価の領域間の関連における年齢段階差

下位領域間の関連における年齢段階差の検討において，有意差のほとんどは生活的自己領域と他の領域との関連において存在した[4)]。

生活的自己の経済面をめぐる年齢段階差　今回の検討では，生活的自己の経済面と多くの領域との関連において年齢段階による有意差が見出され，男女を問わず中高年期の後半（ポスト中年期・中年後期）と前半（中年前期・プレ中年期）との差であった。この結果は，中高年期の前半と後半の境界に位置づく定年退職というライフイベントによって説明されるだろう。退職を経て年金生活に入ることで，男性では仕事や役割（社会的自己）と経済活動が分割され，家族内での位置づけや身近な人間関係（内的自己）も経済活動から離れて再構築される。このような生活上の変化に伴って，経済面と他の自己領域との関連は中高年期後半に弱まったと考えられる。女性でも類似した結果が得られたことから，自身の定年退職のみならず，夫（配偶者）の定年退職も経済面と他の自己領域との関連に影響を及ぼすことが示された。加えて女性の結果は，この数十年，女性のライフコースが大きく変化していることを反映していた。たとえば経済活動である仕事と家庭生活の双方を担い優先順位に葛藤するプレ中年期において経済面と内的自己との関連が有意に高く，女性の生き方が妻・母役割に限定されていた1930年代コホートのポスト中年期では経済面と社会的自己との関連が有意に低かった点などは，端的な例である。

生活的自己の健康面をめぐる年齢段階差　生活的自己の健康面では，女性にのみ，外見および内的領域との関連において年齢段階による有意差が存在した。そしてその差は中年前期とプレ中年期・中年後期との間に見出された。身体（健康・外見）および内面は個人の内的資源と目される領域である。それらの関連における有意な年齢段階差が見られたことから，女性の中高年期において，内的資源に対する認識は年齢によって変化することが窺える。すべての相関が中年前期のほうがより高い値を示した点は経済面と同様である。従来の成人発達研究において，中年前期はさまざまな領域における衰え，ならびに更年期の開始を含む健康面や心理面の不調による影響が示唆されている (Whitbourne, 2002)。そのような特徴を有する中年前期には外見・健康・内面に対する評価が同時に低下するのに対し，プレ中年期では，身体面の衰えの認識は外見の自己評価に焦点化されていると考えられる。この推察は，プレ中年期におけ

4) 男性では生活的自己以外にも，外見的自己と内的自己，外見的自己と社会的自己との関連においても年齢段階による有意差が見出されている。しかし，先行研究が不足しており相関分析の考察の上に推測を重ねることとなる。よってここでの積極的な言及は避け，今後に向けての課題としたい。

る外見領域に対する自己評価は他の時期に比べ有意に低いが ($F(3, 1107)=4.55$, $p<.01$, Tukey 法による post hoc 検定結果 ($p<.05$)：プレ<後期・ポスト）健康面の評価に有意差は見られなかった点，すなわちプレ中年期では外見のみで有意に評価が低いことから支持されるだろう。さらに，中年前期・後期・ポスト期女性では生活的自己 2 側面は中程度の相関 ($.40 \leqq r \leqq .52$) を示したのに対し，プレ中年期では弱い相関しか見られなかった ($r=.27$)。これらの結果を併せ，プレ中年期の女性において健康面の評価が独立して付与される傾向は，他の発達期と比べて強いと言えるだろう。一方，中年後期は，加齢に伴う変化に対する焦りや努力の時期を過ぎ，補償や非関与が主流となる時期とされる (e.g., Heckhausen, 2001)。この知見を適用して考察すると，中年後期の女性は，子どもの自立や夫の定年退職に伴い家庭人としての役割を離れ，容貌への関与を停止し健康に焦点化する，それが健康面と外見，健康面と内的自己との関連が中年前期と比べ弱かったという結果につながったと考えられる。

総合的考察

本研究では，中高年期における自己評価の発達的特徴を構造面において明らかにすることを目的に，自尊感情との関連，下位領域間の関連，それらの関連における年齢段階差を検討した。ここでは今回行った 3 つの分析結果をまとめ，中高年期の発達的特徴について考察する。

自己評価の構造面における中高年期の発達的特徴

本研究では，自尊感情と自己評価との関連，ならびに自己評価の領域間の関連を検討する中で，各年齢段階で異なる様相を見出した。自尊感情と自己評価との関連では，全年齢段階で内的自己が有意な説明変数でありながら，加齢に伴う社会的変化の影響下にある中年前期，ポスト中年期では，社会面・経済面の自己領域も有意な説明変数であった。一方，領域間の関連の検討では，主に経済面と他領域との関連において，中年前期はポスト中年期・中年後期よりも領域間の相関が高かった。したがって，中高年期における下位年齢段階は，自己評価の構造面において発達的差異を有することが示唆される。自己概念の機能や構造が状況に応じて柔軟に変化することは成人発達研究・自己研究の双方で指摘されている (e.g., Baltes & Baltes, 1990 ；伊藤，2002)。この点を踏まえて考察を進めれば，自己評価は中高年期の発達的文脈に対応して柔軟にその構造を変容させながら，本研究で見出されたような独自の特徴を形成していると考えられる。

中高年期における自己領域間の独立性――“well-being の逆説”との関連から

本研究では，自己領域間の関連を，各領域が明細化され独立に捉えられる程度と見なして検討を行った。相関分析の結果から，中高年期成人は概ね自己の各領域を独立に捉え評価すると示唆された。そして，領域間の年齢段階差の検討からは，生活的自己の経済面と他領域との関連を中心に，中年前期あるいは中高年期前半（プレ・前期）と中高年期後半（ポスト・後期）との間で有意差が見出された。その内容は中年前期あるいは中高年期前半のほうが相関が強く，後半のほうが弱いというものであった。ここから中高年期を通して自己領域の独立性は保たれているが，加齢に伴い，よりその傾向は強まると思われる。一方，Table 1 に示されるように，自尊感情や自己評価は，高年齢群のほうが有意に高得点を示す，もしくは低年齢群との有意差は見られず，“well-being の逆説”に一致する結果が得られた。これらの結果を併せると，中高年期において領域間の独立性が“well-being の逆説”の成立にあたって一役を担っていること，そこには先行研究に示される“補償を伴う選択的最適化”(Baltes & Baletes, 1990)や“自己複雑性”(Linville, 1987) などのメカニズムが介在していると考えうるであろう。

中年前期――“危機”の発達期

中年前期において，総じて他の年齢段階期に比べて領域間の相関が強い傾向にあったことは，中年前期がもつ発達的特徴と考えられる。先行研究によれば，中年前期は老いが始まる時期であり，身体面・心理社会面の衰えによるネガティブな影響が最大である（若本・無藤，2006；Whitbourne, 2002）。よって，中年前期における領域間の関連が他の年齢段階に比べて高いとの結果も，このような特徴と関連があろう。すなわち多領域にわたり人生最初の衰えが生じるこの時期，多くの自己領域に対する評価が同時に低下し，結果として自己評価間の相関が高くなったと推測できる。

別の角度からの手がかりとして，中年前期が“危機 crisis”の時期として位置づけられていることが挙げられる。力動論的立場で言う“危機”においては，老いに見合う自己概念の再構築の過程で一時的な心理的動揺が生じうると指摘されている（e.g., Levinson, 1978；岡本, 2002）。すなわち，老いの影響下，衰えの自覚による落胆が自己領域に対する正確な判断・評価を鈍らせ回避や否認を招く，ともすれば実際にはさほど衰えていない領域までも一括りにされて自己評価が低下するなどの例が想像される。仮にこのような動揺や混乱が生じているとすれば，それらは発達上・適応上のリスク状態と見なせるかもしれない。先に述べた，自己領域間の独立性が高水準の well-being を維持するための基盤となるとの知見によってその可能性が傍証されよう。

限界と課題

本研究は少数の変数を用いた横断モデルの研究として行われている。今回得られた発達的知見をより確かなものとするためには，縦断モデルを適用した多角的な検討を追加することが求められる。また既述したように，サンプルの等質性が十分に確保されていない。したがって，得られた知見を過度に一般化・普遍化することは慎むべきであろう。現在，成人発達は，特定の時代，社会，場所における過程として，多様性を含んで理解しようとする趨勢にあると言われる（遠藤，2003）。本研究も現代日本における中高年成人の発達の一形態として理解することが必要と思われる。

引用文献

蘭　千壽（1992）．セルフエスティームの形成と学校の影響　遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽（編）　セルフ・エスティームの心理学――自己価値の探求――　ナカニシヤ出版　pp. 57–70.

Baltes, P. B. (1987). Theoretical proposition of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology,* **23**, 611–626.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (Eds.) (1990). *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences.* New York: Cambridge University Press.

Brandstädter, J., & Greve, W. (1994). The aging self: Stabilizing and protective process. *Developmental Review*, **14**, 52–80.

Diener, E. L., Emmons, R. A., Larson, R. J., & Griffen, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71–75.

遠藤利彦（2003）．最近の研究動向：発達　日本教育心理学会（編）　教育心理学ハンドブック　有斐閣　pp. 85–92.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.

Fleeson, W., & Heckhausen, J. (1997). More or less “me” in past, present, and future: Perceived lifetime personality during adulthood. *Psychology and Aging*, **12**, 125–136.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development.* Boston: Harvard University Press.
（ギリガン，C. 岩男寿美子（監訳）（1986）．もうひとつの声　川島書店）

Harter, S. (1998). The development of self-representation. In W. Damon, & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology.* Vol. 3. *Social, emotional, and personality development.* 5th ed. New York: Wiley. pp. 553–617.

服部　環（2002）．仮説をモデル化し検討する――構造方程式モデリング――　渡部　洋（編）　心理統計の技法　福村出版　pp. 151–166.

Heckhausen, J. (2001). Adaptation and resilience in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife de-*

velopment. New York: John Wiley & Sons, Inc. pp. 345–394.

星野　命（1970）．感情と心理と教育（1, 2）．児童心理, **24**, 1264–1283, 1445–1477.

伊藤忠弘（2002）．自尊感情と自己評価　船津　衛・安藤清志（編）　ニューセンチュリー社会心理学 1　自我・自己の社会心理学　北樹出版　pp. 96–111.

上瀬由美子（1999）中高年期における自己認識欲求　心理学研究，**70**, 195–202.

Lachman, M. E., & Bertrand, R. M. (2001). Personality and the self in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development.* New York: John Wiley & Sons, Inc. pp. 279–309.

Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life.* New York: The Sterling Lord Agency, Inc.

Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression.　*Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 663–676.

Marsh, H. W., Ellis, L. A., & Craven, R. G. (2002). How do preschool children feel about themselves? Unraveling measurement and multidimensional self-concept structure.　*Developmental Psychology*, **38**, 376–393.

Marsh, H. W., & Hattie, J. (1996). Theoretical perspectives on the structure of self-concept. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept.* New York: Wiley. pp. 38–90.

Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. (1998). The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness.　*Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1333–1349.

西田裕紀子（2000）．成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究　教育心理学研究，**48**, 433–443.

岡本祐子（編著）（2002）．アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房

小塩真司（2004）．SPSS と Amos による心理・調査データ解析――因子分析・共分散構造分析まで――　東京書籍

Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it ?: Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069–1081.

佐久間路子（2002）．関係的自己の可変性：大学生と主婦の比較　お茶の水女子大学人文科学紀要，**55**, 307–317.

沢崎達夫（1995）．自己受容に関する研究（3）――成人期における自己受容の特徴とその発達的変化――　カウンセリング研究，**28**, 163–173.

清水紀子（2004）．中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ　発達心理学研究，**15**, 52–64.

Stevens, J. (2002). *Applied multivariate statistics for the social sciences.* 4th ed. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

豊田秀樹（1998）．調査法講義　シリーズ調査の科学 1　朝倉書店

若本純子（2003）．老年前期における心理的適応と規定因――主観的老いの経験，主観的年齢，多次元的自己に注目して――　お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム“誕生から死までの人間発達科学”平成 14 年度公募研究成果論文集，237–248.

若本純子・無藤　隆（2004）．中年期の多次元的自己概念における発達的特徴――自己に対する関心と評価の交互作用という観点から――　教育心理学研究，**52**, 382–391.

若本純子・無藤　隆（2006）．中高年期の well-being と危機――老いと自己評価の関連から――　心理学研究，**77**, 227–234.

Whitbourne, S. K. (2002). *The aging individual physical and psychological perspectives.* 2nd ed. New York: Springer Publishing Company.

― 2006.4.13 受稿，2007.1.10 受理―

Developmental Characteristics of Self-evaluation in Middle and Late Adulthood: Self-esteem and Five Domains of Self-evaluation

Junko Wakamoto
Shiraume Gakuen University

The Japanese Journal of Personality 2007, Vol. 16, No. 1, 1–12

The present study tried to clarify developmental characteristics of self-evaluation, consisting of five domains, in middle and late adulthood, with 2,026 participants of 30-year through 75-year old. Self-esteem as the criterion, self-evaluation of internal self was a significant predictor in middle and late adulthood, and those of social and economic self were also significant predictors during early and post middlescence. The five domains were more or less independent of each other in middle and late adulthood. In examination of age-group differences in correlations among the five, men showed significant differences in those of economic self with other domains, while women showed differences in those of both economic and health domains with others. The correlations were relatively high during early middlescence, but the domains grew more independent of each other during late and post middlescence. Especially, the correlations of economic self with other domains gradually but significantly decreased during early, late, and post middlescence. It was suggested that self-esteem and structure of self-evaluation explained developmental characteristics, such as the "paradox of well-being" and "crisis" in middle and late adulthood.

Key words: middle and late adulthood, self-evaluation, self-esteem, adult development